

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380909

研究課題名(和文) 自己制御に係る2つの気質と対人場面での「自己」の制御：就学前期の縦断研究

研究課題名(英文) Emotion-related temperamental regulation and interpersonal self-regulation in preschool age children

研究代表者

水野 里恵 (Mizuno, Rie)

中京大学・心理学部・教授

研究者番号：10321019

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：2010年出生コホートを対象にした3年間の縦断研究の結果、下記の3点が明らかになった。乳幼児期から就学前期にかけて、エフォートフル・コントロールと行動的抑制傾向の2つの気質的個人差が安定していること、エフォートフル・コントロールが高い子どもは、下のきょうだいに対して主張面・抑制面双方で「自己」の制御ができており、行動的非抑制傾向にある子どもは同年齢の子どもに対して自己主張ができること、行動的抑制傾向が高い子どもは内在化問題行動を示しやすい一方、エフォートフル・コントロールが高い子どもは外在化問題行動を示しにくいことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：From infancy to preschool age, children's two temperamental dimensions: "effortful control" and "behavioral inhibition" appear stable. Two temperament had different influences on the self-regulation behaviors in the interpersonal situation. Children with high on the effortful control show high on self-regulation behaviors, such as self-assertive aspects and self-control aspects, toward siblings. Children with low on the behavioral inhibition show high on self-assertive behaviors toward peers. Two temperament had influences on the behavior problems; Children with high on the behavioral inhibition show internalizing behaviors and Children with high on the effortful control does not show externalizing behaviors.

研究分野：発達心理学

キーワード：気質 エフォートフル・コントロール 行動的抑制傾向 自己制御 対人場面

### 1. 研究開始当初の背景

(1)研究代表者は、2010 年出生コホートを対象に 2 つの気質 (エフォートフル・コントロールと行動的抑制傾向) に焦点を当てた縦断研究を実施してきた。

(2)エフォートフル・コントロールと密接に関連する前頭前野は 2 歳から 7 歳にかけて組織化が進むこと、実行注意の根底にある回路の決定的な要素が 7 歳までに発達を遂げることが明らかになっている (Rothbart, Posner & Kieras, 2006)。このことから、少なくとも 7 歳までは、エフォートフル・コントロールも環境の影響を受けて変容する余地が多いと考えられる。行動的抑制傾向は自己主張が奨励されるアメリカ文化の中では問題となる気質であるが (Kagan et al., 2007)、他者への配慮が重要とみなされる日本文化の中では異なった評価や処遇を受ける可能性がある。

(3)就学前期になると子どもの対人関係の拡がりにつれ、対人場面でいかに「自己」を制御するかを子ども自身が考え行動を身につけるようになる。さて、そうした「自己」の制御の在り様は、養育者の価値観や日本文化に内在する「自己観」「他者観」からの影響を受けると考えられる。

### 2. 研究の目的

(1)2010 年出生コホートを対象に、乳幼児期から就学前期にかけてのエフォートフル・コントロールと行動的抑制傾向の変容・安定性の検討を行う。

(2)就学前期の子どもの対人場面での「自己」制御行動にエフォートフル・コントロールと行動的抑制傾向との 2 つの気質が与える影響、養育者の文化的価値観が及ぼす影響について検討する。

(3)就学前期の子どもの問題行動や母親の育児ストレス・分離不安にエフォートフル・コントロールと行動的抑制傾向との 2 つの気質が与える影響について検討する。

### 3. 研究の方法

(1)乳幼児期からの縦断研究協力者の 2010 年出生コホートを対象に①51.7 ヶ月齢 (SD=4.01)、②64.7 ヶ月齢 (SD=3.64)、③5.8 歳 (SD=0.4)の時点で質問紙調査を実施した。

①②では、日本語版 Childhood Behavior Questionnaire (CBQ) から、恐れ (Fear)、シャイネス (Shyness)、注意の焦点化 (Attention Focusing)、注意の転移 (Attention Shifting)、抑制コントロール (Inhibitory Control)、知覚的敏感性 (Perceptual Sensitivity)、強度の低い刺激に対する喜び (Low-Intensity Pleasure)、怒り / フラストレーション (Anger / Frustration) の 8 次元の気質的個人差測定を行った。①では気質測定に加えて、母親の精

神衛生の指標として、分離不安・育児ストレスの測定を行った。②では気質測定に加えて、子どもの対人場面での自己制御行動を質問紙 (水野, 2002)により測定した。また、対人場面における子どもの自己制御行動 (自己主張、自己抑制) についての養育者の持つ価値観や発達期待について回答を求めた。

③では CBCL (日本語版 4 - 18 歳用)について回答を求めた。

(2) 2010 年出生の第一子といった母集団をより代表する標本 524 名を対象に、対人場面での自己制御行動に関するウェブ調査を実施した。調査内容は子どもの自己制御行動と養育者の持つ価値観・発達期待と養育者自身の自己制御行動について尋ねるものである。

### 4. 研究成果

研究室コホートに関しては、乳幼児期の気質データを合わせて、研究成果を報告する。

	平均月齢・年齢 (SD)	人数	
T1	11.6 ヶ月齢 (3.57)	267 (男 115, 女 134 性別不明 18)	乳 幼 児 期
T2	21.3 ヶ月齢 (3.54)	127 (男 50, 女 67, 性別不明 10)	
T3	40.5 ヶ月齢 (3.61)	85 (男 37, 女 48)	
T4	51.7 ヶ月齢 (4.01)	69 (男 29, 女 40)	①
T5	64.7 ヶ月齢 (3.64)	63 (男 27, 女 36)	②
T6	5.8 歳 (0.4)	53 (男 22, 女 31)	③



### (1) 乳幼児期~就学前期のエフォートフル・コントロールと行動的抑制傾向の変容・安定性

	T1_EC	T2_BI	T2_EC	T3_BI	T3_EC	T4_BI	T4_EC	T5_BI	T5_EC
T1_BI		-.149	.515 ***	-.159	.312 *	-.011	.462 ***	.075	.277 *
T1_EC			-.071	.253	-.227	-.113	-.317 *	-.065	.398 **
T2_BI				.012	.638 ***	.601 ***	-.190	.496 ***	.223
T2_EC				-.046	.289 *	-.088	.350 *	-.227	-.317 *
T3_BI						-.118	.771 ***	.172	-.672 ***
T3_EC						-.010	.725 ***	-.032	.674 ***
T4_BI							.143	.778 ***	.228
T4_EC								.096	.833 ***
T5_BI									.132

エフォートフル・コントロール・行動的抑制傾向とともに時点間での有意な相関が見られ、個人差は安定していた。

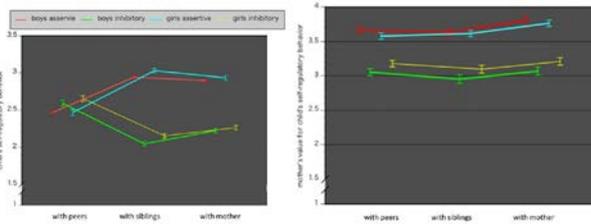
### (2) 就学前期の子どもの対人場面での「自己」制御行動

①就学前期の子どもの自己制御行動の構造ウェブ調査のデータ分析を行うことによって、就学前期の子どもの自己制御行動の構造を求めた。(a)友達といる場合、(b)きょうだいといる場合、(c)母親といる場合の 3 場面それぞれの 18 項目について主成分分析をして、

バリマックス回転を行った。固有値の推移・解釈可能性を考慮して、それぞれの場面ごとに「自己主張的自己制御行動」・「自己抑制的自己制御行動」の因子が抽出された。各因子に負荷する項目の加算平均値を算出し、自己主張的自己制御行動尺度得点・自己抑制的自己制御行動尺度得点を作成した（自己抑制項目13・14・17は逆転項目）。

	対同年齢の子ども	男	女	きょうだい	母親	父親
1 ゲームを断つ時、遊びのやりかたを教えるなど、自分のよいとけはつきり言う	.687	-.057	.718	-.070	.719	.119
2 脅かしてとどめを刺す、やましいことを暴露する	.120	.669	.013	.699	.149	.711
3 自分の意見を押しつらいう	.787	-.011	.799	-.026	.759	.071
4 悪いのがやるとなると、怒る	.111	.687	-.035	.700	.150	.788
5 約束を破ると、怒る	.664	.122	.716	-.116	.707	.079
6 貸した品物やお金を返さない	.099	.599	-.012	.640	.245	.545
7 謝罪をしない	.748	.047	.829	-.081	.794	.041
8 悪いことをしても、後悔しない	-.013	.587	.040	.572	-.014	.658
9 約束を破ると、怒る	.689	-.064	.693	-.203	.729	-.106
10 注意をされても、反省しない	.136	.585	.135	.436	.155	.585
11 何事も自分ではまじめにしない	-.478	-.232	.587	-.345	.581	-.321
12 悪いことをしても、後悔しない	.685	.037	.756	-.051	.748	.046
13 悪いことをしても、後悔しない	.759	-.647	.276	-.635	.253	-.686
14 一度言い争った、謝罪された後でも、話を聞かない	.738	-.658	.219	-.654	.270	-.683
15 悪いことをしても、自分から謝罪しやうとしない	.682	.078	.784	.074	.769	.084
16 悪いことをしても、謝罪しない	.589	-.067	.682	-.082	.677	.032
17 約束を破ると、怒る	.763	-.539	.341	-.532	.333	-.687
18 悪いことをしても、後悔しない	.585	.016	.633	-.083	.632	.059
母の平均	24.30	36.41	29.01	17.77	29.20	16.79

②男女別の3場面の主張面・抑制面の自己制御行動尺度得点の平均値の比較・母親価値観尺度得点の平均値の比較：相手が誰かによって主張面・抑制面の自己制御行動尺度得点の平均値に有意な差があるかを検討するため、性別（被験者間）×場面（被験者内、(a)(b)(c)の3場面）×側面（被験者内、主張面・抑制面）の3要因の分散分析を行った。次に、母親の価値観尺度得点に対して、性別（被験者間）×場面（被験者内、(a)(b)(c)の3場面）×側面（被験者内、主張面・抑制面）の3要因の分散分析を行った。



(ア) 主張面の自己制御行動尺度得点の平均値は抑制面の平均値と比較して有意に高かった。(イ) 友達という場合には主張面・抑制面の平均値に有意な差はなかったが、きょうだいや母親と一緒にいる場合は、主張面の平均値が抑制面の平均値より有意に高くなった。(ウ) 主張面の自己制御行動の平均値は、友達という場合がきょうだいや母親と一緒にいる場合より有意に低かった。(エ) 抑制面の自己制御行動の平均値は、友達という場合がきょうだいや母親と一緒にいる場合より有意に高かった。(オ) 母親は自己主張的側面の価値を抑制面のそれよりも高く評価しており、子どもに期待していること、(カ) 母親と一緒にいる時に自己制御行動をよくとることを期待していることがわかった。

③対人場面での自己制御行動に2つの気質が及ぼす影響  
研究室コホートの縦断データの分析を行った。ウェブ調査のデータに実施した自己制御

行動測定項目に対する尺度分析の結果を踏まえて、(a)同年齢の子ども、(b)きょうだいに對する「自己主張的自己制御行動」・「自己抑制的自己制御行動」の尺度得点を算出した。その尺度得点と4時点での行動的抑制傾向尺度得点(BI)、エフォートフル・コントロール尺度得点(EC)との相関を求めた。2つの気質は「自己」の制御行動に関して、同年齢の子ども・きょうだいに對して異なった関与の方向を示した。きょうだいに對して主張面・抑制面双方で「自己」の制御ができる子どもはエフォートフル・コントロールが高い子どもであり、同年齢の子どもに對して自己主張ができる子どもは行動的非抑制傾向にある子どもであると考察された。

	対同年齢の子ども		対きょうだい	
	主張	抑制	主張	抑制
T1_BI	-.175	.035	.219	.013
T1_EC	.011	.189	-.067	.278 *
T2_BI	-.202	-.045	.325 *	-.200
T2_EC	.086	.161	-.053	.272 *
T3_BI	-.321 *	-.040	.081	-.142
T3_EC	.202	.387 **	.280 *	.295 *
T4_BI	-.473 ***	-.024	-.060	-.157
T4_EC	-.137	.319 *	.363 **	.281 *

(3) 子どもの内在化・外在化問題行動と2つの気質との関連

CBCL 採点用プロフィールに基づいて、ひきこもり、身体的訴え、不安/抑うつ、社会性の問題、思考の問題、注意の問題、非行的行動、攻撃的行動の8つの下位尺度得点を算出した。次に、CBCL 採点用プロフィールに基づき、内向尺度、外向尺度を算出した。内向尺度は内在化問題行動の得点、外向尺度は外在化問題行動の得点をあらわすものである。内向尺度は、<ひきこもり+身体的訴え+不安/抑うつ-項目103>で求めた。外向尺度は、<非行的行動+攻撃的行動>で求めた。

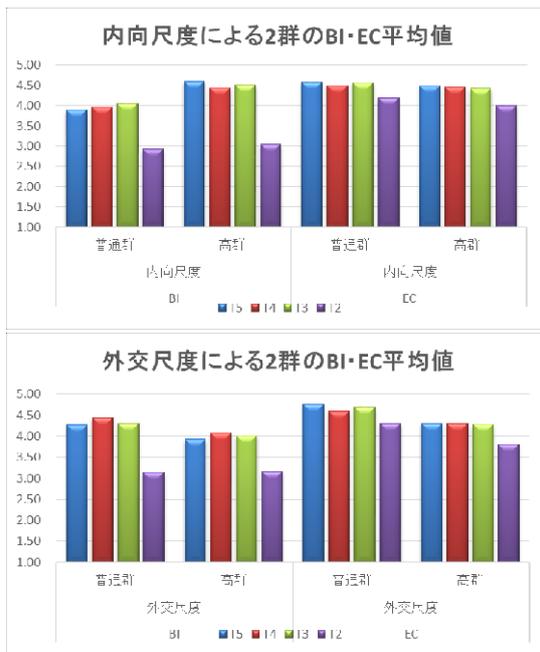
内向尺度、外向尺度による群分け

研究協力者を内向尺度・外向尺度の得点により、それぞれ3つの群に分類した。CBCLの採点用プロフィールを参考にし、T得点が49以下の群を“普通群”，50以上59以下の群を“中間群”，60以上の群を“高群”とした。内向尺度・外向尺度による各群の人数を表に示した。

		外向尺度による3群			合計
		普通群	中間群	高群	
		男児	3	4	
内向尺度による3群に	女児	2	2	3	7
	計	1	2	3	6
	普通群	6	8	7	21
女児	普通群	8	3	0	11
	中間群	4	8	3	15
	高群	1	4	1	6
	計	13	15	4	32

内向尺度による2群、外向尺度による2群の気質得点比較

内向尺度の普通群と高群、外向尺度の普通群と高群で第2回～第5回に測定した行動的抑制傾向尺度得点、エフォートフル・コントロール尺度得点に差が見られるかの検討を行った。



内向尺度の高群は、第5回調査・第4回調査のBI尺度得点の平均値が普通群より有意に高かった。外向尺度の高群は、第5回調査・第3回調査・第2回調査のEC尺度得点の平均値が普通群より有意に低かった。このことから、行動的抑制傾向が高い子どもは就学前期になると内在化問題行動を示しやすいこと、エフォートフル・コントロールが高い子どもは外在化問題行動を示しにくいことが示唆された。調査時点により気質尺度得点の平均値に有意差が見られた時点とそうでない時点があったことから、気質の発達過程における個人差を考慮したさらなる分析が必要であると考えられた。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計5件)

- ① 水野里恵, 就学前期の内在化・外在化問題行動と2つの気質との関連: 行動的抑制傾向とエフォートフル・コントロールの縦断データの分析から, 日本心理学会, 2017
- ② 一木恒佑・水野里恵, 就学前期のエフォートフル・コントロールの発達: 養育者の注意逸らしと子どもの遊びに焦点を当てて, 日本心理学会, 2017
- ③ 水野里恵, 乳幼児期の情動制御に関する2つの気質と社会的発達における個人差との関連: 反応的な制御とエフォートフルな制御, 日本教育心理学会, 2016
- ④ 水野里恵, 対人場面での「自己」の制御: 「ウチ」と「ソト」の発達: 子どもの行動とその母親の行動から, 日本発達心理学会, 2015
- ⑤ 水野里恵, 子どもの気質と対人場面での自己制御行動の発達: 母親の分離不安・育児ストレスに与える影響を考える, 日本教育心理学会, 2015

〔図書〕(計1件)

水野里恵, 金子書房, 子どもの気質・パーソナリティの発達心理学, 2017, 122頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.chukyo-u.ac.jp/educate/psychol/p-kodomo/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

水野 里恵 (Mizuno Rie)

中京大学・心理学部・教授

研究者番号: 10321019

### (2) 研究協力者・リサーチ・アシスタント

一木 恒佑 (Ikki Kosuke)

中京大学大学院・心理学研究科・学生

柴田 茉知 (Shibata Machi)

中京大学大学院・心理学研究科・学生